WONDER PLANET HASHIGUCHI
惑星ハシグチ
2008/DEC. VOL. 05

お元気ですか？紅葉も散り始めました。皆様の所は如何でしょう。秋は稲刈で多忙故か地域行事は少なめでした。惑星ハシグチ、これから時が静止したような冬を迎えます。

EVENT 10月

6日～7日…吉田お宮日（おくんち） 地元春日神社の大祭。（吉井町上吉田）私出席

22日…ホタル育成講演会（橋川内公民館）夜七時～。東京より親族来訪にて欠席。

11月

1日…半農半Xという生き方講演〔食育祭in福岡〕（福岡県春日市クローバープラザ）十時～五時。私出席。

8日…薬師本尊祭（古川寺）朝十一時～。母出席。私送迎。

25日…吉井町エコツーリズム研究会（吉井町ひまわり館）二時～。私出席。

PICK UP THE OKUNCHI

吉田御宮日（おくんち）神輿のお下りに参加する！

吉田御宮日（おくんち）は地元吉井町の南部を司る春日神社の大祭である。神社は、惑星ハシグチの南西部二キロ弱、旧吉田村に位置。田舎ながら立派な神社だ。

〔おくんち〕とは？

北部九州にだけある神社の秋祭。御宮日、御供日、御九日と諸説あるようだが、どれがどうなのか不明。また、何故北部九州だけあるのかも未調査。本社から町の中心部にある鎮守神社へ神輿の**お下り**があり、神社に一泊。**平戸神楽**を始め演芸大会等がおそくまで行われ、翌日**お上り**し本社に御帰還。御大祭をやるというものらしい。大祭には神社の氏子である地域の人々、近郊の神社の神主など約五、六十名が関与する。

〔おくんち〕というお祭りは、小さい頃から知ってはいたが、往時の行動範囲では、祭りの神社は実家から遠く、馴染みのあるものではなかった。時は巡り人生の流れで今年、生まれて初めて私は参加することになったのだ。

召集

それは先ず数日前、地域の担当役を通じてよこされる、神社からの召集状で始まる。丁寧な墨毛筆で、私の名前と祭りの担当役割であろう言葉が書いてある。私のそれは「旗持ち」。その時点で、その紙裏面に「錦織」と書いてあるのを私は知らない…。

当日

やや汗ばむ程の十月六日祭り当日、午後一時過ぎ。私は惑星ハシグチより同じく召集された、幼馴染みで一年下のF君と待ち合わせ場所で落ち合う。地元にずっと住んでいるF君に過去の経験からの祭りの様子を聞くのだが、彼も余り知らない様子でイマイチ要領を得ない。やれやれ。とにかくよく判らないまま二人で神社に向かう。

午後二時、神社に着くとすでに多数の人々や近隣の神社より応援に来ているという神主等が何やら行き来している。神主数人の独特の衣装、その日本古来の色の美しさがまず目に飛び込んで来た。その青緑色を中心に微妙に変化しているそれぞれの衣装。それに烏帽子姿というのも不思議な優雅さがあり、今が何時の時代か、ふと忘れてしまいそうだ。

境内の一画に、吹き流しのようになった竹竿が約十本ほど用意してあり、係の人が脇にいる。私達が近づくと、既に過去何十年とやって来た、という感じの爺さんが「旗持ちか？」と問われる。「はい」と答えると「何の旗？自分のを確認して」と。良く見ると旗はそれぞれ、五色の色名等が書いてある。F君は「五色の緑」だったか、召集状の裏を見ながら、自分の旗を確認しているようだ。

私は、持参して来たはずの召集状がない。気付くと次々に「旗持ち」担当の人々がやって来て馴れた感じで自分の旗を確認して行く。かなり焦る私。しょうがないので、係の人に事情を伝え、最後に余った旗を私が持つことにした。残ったのは見事な錦織の帯のような旗竿だった。

「はい、これを着て」。ややぶっきらぼうなその爺さんから渡されたのは、揃いの白い法被。背に神社の家紋らしきものが青く染められた、とてもりっぱなものだった。着ると、「ああ、自分もこの町の祭りに参加するのだなぁ」と実感。町から自分が受け入れられたような気がして何か少し嬉しい。と同時に何処か誇らしい気さえしてくるから不思議だ。「…よし、ちゃんとやってみるか」小さく決意する私であった。

御神体

祭りに関係する全ての人たち、（七、八十人はいただろうか）が神殿に召集され御払いの儀式が始まる。私はとにかく新米なので一番後方の端っこからこの儀式の全体を観察。色々何か行われるうちに、御神体を神輿の中に入れるという運びになった。ここで私共は神主の要請で

ひれ伏し、絶対に頭を上げてはならない状態になる。つまり御神体を見てはいけない、らしい。その間、他の神主が「おぉうぅ～」とまるでサイレンのような奇声を上げ続けるのだ。なんナンだこの奇声は！一体全体何が行われているのか？

皆さんも御承知のごとく、見るなといわれて大人しくしている私ではない。一番後ろの端にいることを幸いに、上目使いにこっそり頭を上げる。すると、そこには！　神主数人がかりで、三十センチ四方の何か絹のような上等のふさを大事そうに抱え、神輿の中に入れようとしていた。私の不埒な行為で祭りが台無しになってもチョット困る。ここは少しの間で止めとく。あの袋の中は、たぶん玉ではないか？と思ったりするが…そんなに見てはイケナイものなのか？

神道ってそんなに威圧的なものだったけ？少なくとも江戸中期、平田篤胤の「復古神道」や近代の霊的巨人等の「古神道」にはその気配はないように思う。本物は謙虚である。その後の「国家神道」になってからか？よく判らないけれど…。

個性的な女性シンガー鬼塚千尋の名曲、『月光』がエンディングテーマのTVドラマ、『トリック』は、日本の因習に満ちた村を主に舞台とする独特の空気感あった番組だったが、「まさにあの世界だなぁ…」などと独り言を呟いてるうちに儀式は終り、行列の準備に移動。

お下り

先頭に「ハナタコ（鼻高）」と呼ばれる天狗面を着けた、なんといか、ナマハゲ的に自在に動く二人のパフォーマーを配し、その後に我々「旗持ち」が五色の旗を先頭に並ぶ。その後、神主等が笛と太鼓でお囃子。神輿を担ぐ若衆。そして、何処から用意したのか、神社の代表神主が馬に乗る。これら総勢約五十名が町の中心部までの田舎道約二キロを、途中、休憩をとりつつ、一時間以上かけて列をつくり、練り歩くのだ。参加して初めて気付くのだが、歩きながら、笛、それも横笛を吹き続けるのは難しい。お囃子が途切れないよう数人の神主が交代で吹き歩く。その簡素な音色と音階。素朴な太鼓の音。音色の間を吹き抜ける風に、時折旗がはためく。季節はまさに実りの秋。辺りには黄金色の撓わな稲穂の田圃。日本の原風景、里山の秋日の中を、笛と太鼓の音だけ辺りに響かせながら、ゆっくり、ゆっくりと私共は歩いて行く。年々時間の流れが加速していると言われる現在、この優雅さはどうだ。いにしえの人々のそれは、かようなものだったのか…と実感。ふと、自分はまるで黒澤映画のワンシーンにいるような感じがした。

やがて、行列は目的の鎮守神社（熊野神社）に着き私共の本日のお役目は終了。神社からは、綺麗な袋に入った、お茶、お神酒、五穀米、とタオルだったかを御礼に戴く。また少し地元人になった気がした。

PICK UP

「半農半Xという生き方」塩見直紀氏に会いに行く

こちらに戻って来てから、「田舎暮し」とか「農」とかの文字が自然と目につく。そんな中、出会った本に、**『田舎暮しに殺されない法』丸山健二著**（朝日新聞出版／08年刊）と**『半農半Xいう生き方』塩見直紀著**（ソニーマガジンズ新書／08年刊）があった。どちらも田舎で育ち、都会で過ごし再度田舎へ戻った人からのメッセージだ。前者は芥川賞作家六十代後半。田舎暮しも長く、田舎のネガティヴ性をよくぞここまで！というくらい精緻に観察。

一方後者は四十代前半。田舎のポジティヴ性を地球環境的視野から見据えようと試みている。田舎暮しに興味ある方には共に◎オススメ。

私は後者の『半農半X』というコンセプトに新鮮さを感じた。さらに今までネガティブな文脈でしか伝わって来なかった田圃や農的風景に、全く位相の違う眼差しを提示している点に何より瞠目。これは今まで誰も成し得なかった事なのでは？と思う。それは、拡大した意識から農を観るというか、お金には最も換金出来にくい（苦笑）、哲学のようなものなのだが、この眼差しが著者のような負の世代とも言われる世代以降から生まれてることに、次の時代の気配を感じる。

そんな今の私にとって気になる著者、塩見氏の講演がひょんなことで福岡で行われることを知る。十一月一日。食と農の大きなイベントの一つの企画としてだ。氏は京都綾部市の方、この機を逃すと中々近くで会う事はなさそう。これは行くしかないか。ツマラナなかったら即出りゃいい。場所は、皮肉にも去年まで十年間自分が住んでいた街春日市。前住居からは徒歩五分の所。そこへ実家から三時間余りかけて行く。

塩見氏は実際に会うと、物凄く謙虚で物腰の柔らかい正直な人という印象だった。幸運にも個人的に話を伺う機会もあり感謝！。また九州の農の分野では著名な、**宇根豊**氏（農と自然の研究所主宰）との思わぬ対談もあり、来て正解だった。

ささやかプレゼント

塩見氏講演全録音［Ⅰ部、半農半Xという生き方。95分］［Ⅱ部対談、塩見直紀（半農半X研究所）V.S.宇根豊（農と自然の研究所）90分］テープかMD（LPモード）にダビング可デス。御希望の方は希望講演、希望メディア明記で送料分の切手（MD2枚で九十円、テープ2本で二百円目安）をお送り下さい。では、皆様良い年を！